

(要約版)

小津安二郎映画の喫煙表現にみる戦後の日本人のたばこ文化の研究

正清健介 (一橋大学大学院言語社会研究科・映画研究)

1. 研究目的

本研究の目的は、終戦直後から 1960 年代初頭にかけて主に松竹で製作された小津安二郎映画において、どのように喫煙が描かれているかを考察し、その喫煙表現から戦後の日本人のたばこ文化の諸相を明らかにすることである。

小津映画は、飲酒シーンと並んで喫煙シーンが多いことで知られる。実際、小津映画の登場人物のほとんどが喫煙者であり、ほぼすべての小津映画に何らかの形で喫煙シーンが存在する。ところで小津映画のほぼすべては現代劇であり、またその小津の現代劇は過去や空想が描かれないことで知られる。このようなことから、小津映画で描かれる物語世界は撮影当時の日本をモデルとしていると考えることが可能である。したがって、戦後の小津映画、具体的に言えば 1947 年から 1962 年までの小津のトーキーにおける喫煙表現に着目することで、間接的にはあれ戦後の日本人とたばこの関係を垣間見ることができると考えられる。この「1947 年から 1962 年まで」とは、占領期から中村秀之が「ポスト占領期」と呼ぶ戦後復興期を経て 1964 年の東京オリンピックを直前に控えた高度経済成長期の初頭までの期間にあたる。小津が生前、その映画人としてのキャリアの大半所属した松竹は、1930 年代に下級中産階級の日本人の日常生活を描写した「小市民映画」というジャンルを生み出し、それを基盤に「大船調」と呼ばれる独自のスタイルを確立した。小津は、その松竹大船調映画の代表的な担い手であり、晩年に至るまで日本人の日常生活を繰り返し描き続けたことで名高い。したがって、小津映画はフィクションでありながら、上映当時の日本人の文化的状況を反映する史的資料としての側面を持つと予想される。

2. 研究方法

本研究が対象とするのは、『長屋紳士録』(1947 年)に始まる小津の戦後のトーキー全 15 作品である。この 15 作品における喫煙シーンを逐次取り上げ、作品ごとにどのように喫煙が描かれているかを考察するのが本研究の基本線であるが、これに合わせて小津映画での喫煙表現がどの程度当時のたばこをめぐる状況を反映しているかの裏付け資料調査を行った。喫煙シーンの考察では DVD ソフトを使用し、資料調査では、資料として新聞記事、雑誌記事、たばこの広告ポスターを参照した。

まず、新聞は『読売新聞』、『毎日新聞』、『朝日新聞』を中心に全国紙を参照した。次に、雑誌に関しては、本研究では小津映画の喫煙シーンでも女性の喫煙シーンに着目するため、『婦人倶楽部』（講談社）、『婦人公論』（中央公論新社）を中心に女性誌を参照した。最後に、たばこの広告ポスターについては、たばこと塩の博物館編『ポスター1』（たばこ産業弘済会、1987年）を参照した。

3. 研究成果

第1に、本研究では、小津映画において描かれるキセル、シガレット（紙巻きたばこ）、パイプといった様々な種類のたばこでの喫煙のありよう、さらにはセリフのやり取りで示される登場人物の喫煙に対する嗜好・態度を、その喫煙主体である登場人物の属性との関係で考察した。その結果、地方か都市かといった登場人物の居住地、年齢に加え、職業、さらには社会階級が、たばこと密接な関係を結んでいることが明らかとなった。特に、『お茶漬の味』（1952年）と『小早川家の秋』（1961）のセリフのやり取りから、シガレットに関して、それぞれの社会階級にとってふさわしいとされる銘柄の存在が浮き彫りとなった。このようなシガレットの銘柄をめぐる〈ふさわしさの通念〉は、小津映画を見た当時の日本人観客が違和感を持たずに、言わば納得できる程度において当時の日本人の間であまねく共有されていたと考えることができる。

第2に、本研究では、小津映画の喫煙シーンの中でも女性登場人物の喫煙シーンに着目し、その喫煙描写を当時の新聞・雑誌の記事やたばこの広告ポスターといったたばこに関する資料と照らし合わせることで、当時の女性とたばこの関係を考察した。その結果、当時、女性の喫煙が戦前よりはじまる性的イメージを強固に保持ながらも、一方でたばこが多く性の労働者ではない〈一般の〉女性、特に若い女性に日常的に吸われていたことが明らかとなった。当時の日本社会に浸透していた女性の喫煙の性的イメージは、戦前から日本映画において人物造形のための1つの道具として利用されていた。映画において女性の喫煙は、規範からの逸脱、もっと言えば性的なイメージを持っていたと言える。映画で女性がシガレットやキセルをひとたび口にすれば、多くの場合その行為は、その女性がタブーを破る逸脱者であり、母性を体現しない性的に放縦な女性であることを示す記号となった。そのような記号の使用例は、同時代の他の映画監督作品に多々見られる。

ところが、戦後の小津映画で描かれる女性の喫煙にはそのような性的な記号性がほとんど見当たらない。それは、先行の小津映画研究が度々指摘してきた小津の社会的無関心から説明されるべきものではない。小津は常に時代の風俗・流行の最先端を自身の映画に積極的に取り入れていた。この点で、「彼の作品が利用したのは、「日本の伝統」と呼ばれるようなある無定形の実体ではなく、彼の時代の大衆文化

である」と述べたデヴィッド・ボードウェルは正鵠を射ている。したがって小津が喫煙女性の性的イメージを映画表現上の道具として利用しなかったのはある意味で時代に背を向けた行為だったとはいえ、小津が一切合切の現実の社会を無視していたとは言えない。『お茶漬の味』のアヤ（淡島千景）に代表される喫煙女性像は、小津が彼なりの視点で当時の女性と喫煙の関係を作品に導入したものである。その意味でそのような小津が残した性的イメージを排した喫煙女性達の姿は、当時の日本人とたばこの真の関係を知る上で貴重な映像資料となっている。